

## 【論 説】

# 『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造 —自由と平等の原風景を求めて—

的射場 敬 一

## 目 次

はじめに

第1節 英雄の時代の発見

1. ホメロスとシュリーマン
2. ギリシア先史文明の社会構造

第2節 ホメロスの描いたトロイア戦争

1. 全軍集会
2. 口の達者な一兵卒

第3節 戦士たちの共同体

1. 自由農民の成立
2. 平等な「兄弟」たち

結びに代えて

## はじめに

人類の歴史において、自由と隷属、あるいは自由な体制と専制的な体制とを、はじめて自覚的に、比較選択の対象として捉えたのは、「歴史の父」と呼ばれる古代ギリシアの歴史家ヘロドトスであった。ヘロドトスは、紀元前5世紀に生じたペルシア戦争を、自由な体制をもつギリシア諸ポリスと、専制的なペルシア帝国との間の争いとして描き出したのである。

ヘロドトスの記述をみると、当時のギリシア人たちが、自由というものに対して非常に強烈な民族的プライドを抱いていたのが分かる。それが鮮明に描き出されているのが、第2次ペルシア戦争を起したペルシアの王クセルクセス1世がギリシア遠征を前に閱兵を行なった際、スパルタの前王で王位を

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

剥奪されてペルシアの宮廷に亡命していたデマラトスと呼び寄せて会話をする場面である。自軍の威容に満悦したクセルクセスは、デマラトスに向かって「果たしてギリシア人どもが敢えてわしに刃向い抵抗するであろうか否か、わしの攻撃を支えるに足る戦力は彼らにはない」<sup>1)</sup>のではないかと問うた。これに対してデマラトスは、あくまでもスパルタ人に限ってと断ったうえで、「ギリシアに隷属を強いるごとき殿のご提案は、絶対に彼らの受諾するところとはなりませんし、さらにはたとえ他のギリシア人がことごとく殿の御意に従うところがあろうとも、彼ら〔スパルタ人〕だけはかならず殿に刃向かい戦いを交えるであろう」<sup>2)</sup>と応える。これを笑ったクセルクセスは、重ねて以下のように問いを投げる。

「それらの者たちが一人の指揮者の采配の下にあるのではなく、ことごとくが一樣に自由であるとするならば、どうしてこれほどの大軍に向かって対抗し得ようか。いわんや彼らの数を5千人としたならば、わが軍の兵力は彼らの一人に対し千人以上であるにおいてをやじゃ。彼らといえどもわが軍のごとく、一人の統率下になれば、指揮官を恐れる心から実力以上の力も出そうし、鞭に脅かされて寡勢を顧みず大軍に向かって突撃しよう。しかしながら自由に放任しておけば、そのいずれもするはずがなかろう。」<sup>3)</sup>（ヘロドトス『歴史』巻7）

クセルクセスは、そもそもギリシア軍は数の上で圧倒されており、しかも彼らは自分たちが自由であると自覚しているのであるから、絶望的な戦いにみずからの命を投げ出すことはしないであろうと述べているのである。そのような戦いを兵士に強いることができるのは恐怖だけであると、ペルシア王は確信している。しかし、これに対して元スパルタ王は、スパルタ人は一人ひとりの戦いでも何人にも後れをとらないが、「団結した場合には世界最強の軍隊」であると応える。というのも、彼らは自由ではあるが、しかし法という主君を戴いており、「彼らがこれを恐れることは、殿のご家来が殿を恐

れるどころではない」からであり、そして、法の命じるのは、「いかなる大軍を迎えても決して敵に後ろを見せることを許さず、あくまで己の部署にふみとどまって敵を制するかみずから討たれるかせよ」<sup>4)</sup>ということだからである。実際、あの有名なテルモピュライの戦いにおいて、スパルタ王レオニダス1世と300人のスパルタ兵を先頭にしたギリシア連合軍は、約6万のペルシア軍を相手にして、全滅するまで戦い抜いたのである。

また、以下の様なエピソードもある。スパルタはかつてペルシアのダレイオス大王から派遣された使者を処刑したことがある。スパルタはその謝罪の使者として、みずから申し出た2人の有力者を送った。使者たちは、旅の途中でペルシア帝国のアジア沿海地方一帯の軍司令官であったヒュダルネスの許を訪れる。ヒュダルネスは2人を歓待して宴を設ける。その場で彼は、もし使者たちがスパルタを裏切ってペルシア王に仕えれば、彼らがギリシア全土を支配することも可能だと唆す。これに対してスパルタの使者は、「軍司令官殿はギリシア人のことを理解していない」と返答する。次の文章は、その反論の部分である。

「（軍司令官殿は一引用者挿入）奴隷であることがどういうことであるかは御存知であるが、自由であるということについては、それが快いものか否かを未だ身を以て体験しておられぬのです。しかしあなたが一度自由の味を試みられましたならば、自由のためには槍だけではない、手斧をもってでも戦えとわれらにおすすめるに相違ありません。」<sup>5)</sup>（ヘロドトス『歴史』巻7）

スパルタの使者たちが述べたように、古代ギリシアにおいて自由は奴隷との対比において理解されていた。そして、奴隷は都市国家ポリスの形成時から家内奴隷としてギリシアにも存在していた。ギリシア人たち、すなわちポリスの市民たちは、こうした家内奴隷を用いて自身の所有する農地を耕す自由農民であった。ポリスの市民であるということは、法の下に自由な身分を

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

享受するということと同義であったのである。これに対して、ペルシア帝国のような専制国家では、王のみが主人であり、他のすべての者はみな彼の奴隷であるという認識がギリシアにはあった。したがって、ペルシアの支配に服するということは、ギリシア人が自由民から奴隷の身分へと転落するということを意味していた。それは「絶対に彼らの受諾するところ」ではなかったのである。スパルタの使者たちの言に見られるように、自由民としての自負を強く持っていたギリシア人にとって、ペルシア帝国との戦いは、単なる独立の維持の問題ではなく、ペルシアの専制に対して自由民による体制を護り抜く戦いでもあった。

ギリシア連合軍は陸戦では大敗を喫したものの、アテナイが主導したサラミスの海戦においてペルシア艦隊を撃滅することに成功した。クセルクセスはこの敗戦によって戦意を削がれ、結果的にペルシア軍はギリシアから撤退したのである。自国アテナイを占領され略奪されてもお徹底抗戦を続け、超大国ペルシアを敗退させたアテナイ市民の粘り強さの理由をヘロドトスは以下のように分析する。

「かくてアテナイは強大となったのであるが、公の場での<sup>イセゴリア</sup>発言の平等（*iségoria*）ということが、単に一つの点のみならずあらゆる点において、いかに重要なものであるか、ということを実証したのであった。というのも、アテナイが独裁下にあったときは、近隣のどの国をも戦力で凌ぐことができなかったが、独裁者から解放されるや、断然他を圧して最強国となったからである。これによって見るに圧政下にあったときは、独裁者のために働くのだというので、故意に卑怯な振る舞いをしていたのであるが、自由になってからは、各人がそれぞれ自分自身のために働く意欲を燃やしたことが明らかだからである。」<sup>6)</sup>（ヘロドトス『歴史』巻5）

アテナイは、ペルシア戦争勃発の20年ほど前にバイシストラトス家の僭主政を打倒し、紀元前508年のクレイステネスの改革によって民主政の礎を

築いていた。数の上でははるかに劣るギリシア連合軍が、アテナイを中心としてペルシア帝国を撃退できた理由の一つは、まさしくその自由と平等の体制にあるとヘロドトスは述べているのである。

アテナイにおける民主政の隆盛は、同時代の哲学者プラトンやアリストテレスに批判されたことや、思想家のハンナ・アレントによって称揚されたことでよく知られているが、他方で、都市国家ポリスが、いかなる条件のもとでこうした自由と平等の体制を生み出したのかについては、多くが知られているわけではない。事実、後述するように、ポリス形成以前のギリシアにおいては、ペルシア帝国のようなオリент風の専制国家による統治が行われていたのである。本稿では、ポリス形成期に書かれたと言われているホメロスの英雄叙事詩、とりわけ『イリアス』を手がかりに、いかなる風土のおよび歴史的背景によって、アテナイ民主政に結実する自由と平等の文化がギリシアに根づいていったのかを明らかにしたいと思う。

## 第1節 英雄の時代の発見

### 1. ホメロスとシュリーマン

ホメロスの英雄叙事詩は、ポリス形成期とされる紀元前750年前後に書かれたと言われている。ホメロスの作品は、古典時代のギリシア世界で「万人の手本となるべき道徳の教科書」<sup>7)</sup>として選ばれ広く読まれ、その内容は立派な行動をする際の指針とみなされていた。

周知のようにホメロスは『イリアス』と『オデュッセイア』の2篇の英雄叙事詩を残している。『イリアス』はホメロスの時代からさかのぼること約600年前に生じたとされるトロイア戦争を主題にしている。10年もの長きにわたって続いたとされるこの戦争は、小アジアつまり今のトルコにあたる場所にあったトロイアの王子パリスが、スパルタの王妃ヘレネを奪い去ったことを原因とする。『イリアス』は、ギリシアとトロイアとの間で戦われたこの戦争の最後の年を舞台にしている。また、『オデュッセイア』は、トロイ

## 『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

ア陥落後、ギリシア側の英雄のひとりオデュッセウスが、トロイアの地から故郷のイタケに、数々の困難に遭遇しながらふたたび10年もの歳月をかけて帰国する物語である。トロイア戦争におけるギリシア軍の総大将は、アガメムノンである。アガメムノンは、パリシに王妃ヘレネを奪われたスパルタ王メネラオスの実兄であり、弟嫁の奪還のために全ギリシアに号令をかけ、全ギリシア軍を率いてトロイアに戦争をしかけたと描かれている。

詳しくは後述するが、トロイア戦争がホメロスによる創作ではなく、史実である可能性が高いとみなされるようになったのは、近代以降の遺跡の発掘調査によってであり、これによりアガメムノンもまた実在した人物である可能性が高まっている。そして、このアガメムノンの居城と目されているのがミケーネである。ミケーネは、現在のギリシアの首都アテネから南に下り、コリントス地峡を渡ったペロポネソス半島東部のアルゴリダ県に位置している。アテネからミケーネまでは、直線距離では131キロメートル、高速バスで約1時間半かかるが、高速バスを降りてからミケーネの宮殿跡に行くまで徒歩だとさらに1時間ほど要する。というのも、ミケーネの宮殿は、聖イリアス山とその右隣りにあるザラ山という2つの岩山を横切る渓谷によって背後を守られた自然の要砦であるアクロポリスの丘の上に造営されていたからである。

ミケーネの宮殿は、ギリシア・ポリスが栄えた古典時代にはすでに廃墟となり、そのほとんどが地中に埋もれていた。かろうじて見ることができたのは、麓から上っていくとまず目に入る「アトレウスの宝庫」と呼ばれる墓所であり、そこからさらに少し上ったところにあるアクロポリスの丘の、有名なライオンの門とそれに続く巨石を重ねて作られた城壁だけであった。紀元2世紀にギリシア各地を巡り『ギリシア案内記』を書いたパウサニアスによると、

「囲壁の一部、とくに城門がよく残っていて、その門の上には獅子が立ち上がっている。この城壁も、プロイトスのためにティリュンスの城壁

を築いたキュクロプスたちの築造と伝わっている。ミケーネの廃墟のペルセイアと呼ばれる泉場、それにアトレウスとその子たちの地下の建造物があって、ここに彼らの財宝の倉庫があった。アトレウスの墓があり、さらに、アガ멤ノンといっしょにイリオン（トロイア）から無事に生還しながら、アイギストスがもてなしの宴を張った後に殺戮の餌食とした者たちの墓もある。」<sup>8)</sup>（パウサニ阿斯『ギリシア案内記』）

ホメロスによれば、トロイアを陥落させ、意気揚々と故郷のミケーネに帰還したギリシア軍の総大将アガ멤ノンを待っていたのは、妻の裏切りであり、妻と通じたアイギストスによる自身とその配下の謀殺であった。パウサニ阿斯は、ホメロスの記述をもとにして、城壁内にアガ멤ノンの父アトレウスの墓と、アイギストスによって殺害されたアガ멤ノンたちの墓があると書いている。

だが、近代にいたるまで、ホメロスの叙事詩の舞台となった世界、すなわちポリスに先立つ先史時代の文明の存在を本気で信じていた者はいなかった。それは、神話の世界の出来事であり、ホメロスの叙事詩も「単なる詩人の空想の所産」<sup>9)</sup>とみなされていたのである。

1868年の夏、パウサニアスの『ギリシア案内記』を手には、この地を訪れたドイツ人がいた。実業家にして考古学者のハインリッヒ・シュリーマンである。自伝で彼はその時の印象を以下のように語っている。

「ミケーネの城門の上にはライオンが今日もなお3000年前と同じように見張りをしているが、この門の前で彼は次のようなことを考えていた。アガ멤ノンとアトレウスの墓は、今まで考えられていたように、ミケーネの町を囲む壁の内側という広い範囲内ではなく、パウサニアスの言葉どおり城壁の内部にあると考えるべきではないか、というのである。英雄の栄華の跡をとどめる巨大な廃墟の上をおびたしい瓦礫が覆っているのを彼は見た。その下に黄金に富むミケーネの財宝が隠されているか

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

もしれない。」<sup>10)</sup> (シュリーマン『古代への情熱』)

シュリーマンが「黄金に富むミケーネ」と述べたのは、ホメロスが『イリアス』の第11歌で「アテナとヘラとは、黄金満つるミケーネの王に敬意を示して、雷をはためかせた」<sup>11)</sup>と謳ったことを念頭に置いている。トロイア戦争を伝説ではなく史実だと信じ、1870年から73年にかけて行ったトロイア発掘調査が成功したことで一躍世界中の注目を集めたシュリーマンにとって、「黄金に富むミケーネ」は実に魅力的であった。ミケーネの発掘は、トロイア発掘の余勢を駆って1876年に行われ、またしても大成功を収めた。「アガメムノンのマスク」<sup>12)</sup>と称されている黄金のマスクをはじめとして、数多くの黄金製の装飾品が出土したのである。

シュリーマンによるミケーネ遺跡の発掘調査により、古典期をはるかにさかのぼる時代、すなわち紀元前17世紀から12世紀にかけて、ギリシアの地に高度な文明が繁栄していたことが明らかとなった。ミケーネにおけるシュリーマンの功績は、トロイア発掘の結果よりも直接にギリシアの伝承と結びつけることが可能な先史文明の跡を、地中から掘り出したことにある。すなわち、それまでは神話の世界の出来事とされていた英雄の時代が実際に存在していたことを裏づけたのだ。ポリス文明に先立つこの文明は、かの地の名を取ってミケーネ文明と呼ばれることになった。また、この発掘調査は、ギリシア先史時代研究の画期となり、ミケーネ文明および後述するミノア文明の解明の先鞭となったのである。

## 2. ギリシア先史文明の社会構造

シュリーマンによるトロイアとミケーネの発掘に続いて、イギリスの考古学者アーサー・エヴァンズが、1900年にクレタ島のクノッソスの遺跡の発掘に着手した。発掘された遺跡は、ギリシア本土のミケーネなどの遺跡よりも年代が古いことが明らかになり、エヴァンズは、この新たに発見された青



銅器文明をミノア文明と名づけた。クノッソスの発掘では、文字の刻まれた大量の粘土板が出土し、注目を浴びた。クレタ島では、クノッソス以外にも、南部のメサラ平野にあるフェストス、そして、アイア・トリアザなどでも宮殿跡が発掘され、そこからも文字の刻まれた粘土板が発見されている。だがそれはクノッソスで発見されたものとは異なっていた。エヴァンズは、相互参照し、クノッソス宮殿跡で発見された粘土板の文字を線文字 A、その他の遺跡で発見された文字を線文字 B と名づけた。クレタ島では他にも象形文字が発見されている<sup>13)</sup>。

さらに、1939 年にアメリカ人カール・ブレーゲンがペロポネソス半島西部にあるピュロスを発掘し、数百枚の粘土板を発見した。そして、そこに刻まれていた文字は線文字 B であった。線文字 B は長らく解読不明であったが、1953 年にイギリスの若き建築家マイケル・ヴェントリスがギリシア語として解読に成功した<sup>14)</sup>。特にピュロスでは出土した粘土板の数が多かったことで、謎に包まれていたミケーネ社会の構造が次第に明らかになってきている。

これまでに判明したところによると、ピュロスで発見された粘土板には、土地の割り当てや奴隷の分配、職人に命ずる製品の種類や数、農民に課した農作物の供出量や未納分、家畜の徴収や労働力の徴発などが詳細に記録されており、食糧の配分などにもいちいち名をあげ人数を記して、その量が規定されているという<sup>15)</sup>。このことから、王の周囲には多くの官僚がいて、さまざまな職種を分担し、社会生活をこと細かく規制していたことが想像できる<sup>16)</sup>。この社会は、線文字 B で「ワナカ」(ギリシア語の王)と表記された強力な「神的王」が支配していた。ワナカは、戦争と平和を決し、さまざまな祭祀を執り行い、民から年貢を取り立てると同時に賦役を課し、さらに通商を許可し物品の製作を命じていた。つまり、軍事・宗教・政治・経済に関わるすべての権力が彼の一手に握られていたのである。端的に言って、ミケーネ文明の諸王国は、まさしく専制国家であり、「奴隷制と貢納制をもつ」<sup>17)</sup>官僚制的貢納国家であった。

このことを顕著に示すのが、ミケーネのアクロポリスの丘にかつてあった

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

宮殿を囲む城壁である。それは、敵の攻撃に備えて自然の巨石を積み上げた分厚いものであり、厚さは3メートルから9メートルもあり、高さは7メートル半を超えることもあった<sup>18)</sup>。そこには周囲を監視し、かつ宮殿を防備するという軍事的色彩が強くあらわれている。城門であるライオンの門の内側の梁に使われている石材は、それぞれ20トン以上もある巨大なものである。入り口の幅は、下が3.1メートル、上が2.9メートルである。ここに据え付けられているライオンの彫刻は、高さが3.10メートル、幅が3.60メートル、厚さが0.70メートルあり、ヨーロッパに残る巨石彫刻としては最も古いもののひとつである。向かい合った2頭のライオンの頭は正面を向いていたと思われるが、現存はしていない。2頭のライオンは中央の祭壇の上に前足を置いており、祭壇の上には円柱が立っている。円柱の上にも何かがあったはずだが、それは失われている。全体としての図像はおそらくミケーネの王家かミケーネ市の紋章だったのではないかと推測されている。

巨大な自然石によって構築された城壁をもつミケーネの遺跡を目にした古典期のギリシア人たちは、これはとても人間の手に負えるものではないと思い、これを作ったのは人間ではなく、ホメロスの『オデュッセイア』に登場するキュクロプスという一つ目の巨人族に違いないと考えた。そこから、このような巨石を積み上げる城壁建造様式は、「キュクロプス様式」と呼ばれるようになった<sup>19)</sup>。ミケーネ文明は、線文字Bの使用から明らかのように、エーゲ海に浮かぶクレタ島を中心としたミノア文明を継承しつつも、ミノア文明が温和で平和的であったのに対して<sup>20)</sup>、軍事的で好戦的な文明であったことが推測できる<sup>21)</sup>。

ミケーネ文明の崩壊から約500年後に成立することになる都市国家ポリスの城壁がはるかに薄く、また、市庁舎などの公共施設や公共の広場、そして何よりも市民の住居をその範囲内に含んでいたのに対して、ミケーネの頑丈な城壁で囲まれた地域はきわめて狭い。王家の居住区である宮殿の他にその内部に含まれていたのは貯蔵庫だけであった。ミケーネの宮殿はメガロン形式と呼ばれ、王座を中心とする求心的な構造を特徴としている。4本の柱に

よって支えられていた宮殿の主室には、宗教的な機能をもつと考えられている円形の竈<sup>かまど</sup>があり、傍らの壁際には王座が据えられていた<sup>22)</sup>。王個人に対する権力の集中が進んでいたことを示している。また、ミケーネ文明において公的な人的資源と物的資本は、書記官・官僚・王族を守ることに投入されており、周辺の耕作地や一般住民をまもる歩兵軍団の編成は、ないがしろにされていた<sup>23)</sup>。粘土板に刻まれていた内容や遺跡を見るかぎり、ミケーネ文明の諸王国は、オリエント世界の専制国家に似た、王を頂点とする垂直結合的な社会を維持していたことがわかる。

だが、このことを強調しすぎるのは、かえって行きすぎであろう。オリエント世界の帝国が強力な中央集権化を必要としたのは、その強権によって大河のほとりに大規模な運河を建設し、灌漑農業を可能にするためであった。いうなれば、巨大な土木事業を遂行するために専制国家化を進める必要があったのである。これに対して、山がちで平野部が狭隘なギリシア世界では、天水に頼る農業が行われていた。つまり、エコロジカルな要因によって、ギリシアではオリエント世界の帝国ほどの王権の強大さを必要としなかったのである。それゆえ、ギリシア世界全体の専制的な統一も、オリエント世界ほどには強力に推し進められることがなかった。ミケーネの王を宗主としつつ、いくつかの小王国が分立し、それぞれが小型の専制国家の形態を取っていたのである<sup>24)</sup>。

したがって、ミケーネ文明の統一性は、分立した小王国における宮廷文化の近似性と、伝承から推定される諸王間の密接で個人的な関係によって保たれていた<sup>25)</sup>と考えられる。また、国王の権威もオリエント世界におけるほど絶対的ではなかった。オリエントの帝国において、社会的統合の核となっていたのが、ときには神と同一視されるほどの絶対性を示威する王の存在であったのに対して、ミケーネ文明の諸王国では、神的王ワナカは王の絶対性を担保する表象の体系を整備することができなかったのである。実際、ミケーネ文明の遺跡からは、オリエント世界では普遍的に見られる威圧的な王の像やレリーフはまったく発見されず、王個人の名前すらどこにも記され

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

ていないのである<sup>26)</sup>。史実としてのトロイア戦争は、こうした専制的な小国家群がミケーネ王を盟主としてトロイアに挑んだ戦争であったと推測することができる。

約5世紀にわたって繁栄を謳歌したミケーネ文明ではあるが、紀元前1200年頃に突然崩壊する。そのとき、各都市の宮殿はことごとく破壊された。ほとんどの宮殿跡に猛火に包まれた形跡が残っており、破壊は北から南へと進んだという<sup>27)</sup>。その原因については、侵略、内部抗争、奴隷の反乱、地震、干ばつ、海賊、あるいは度をこした官僚化の弊害がもたらした制度崩壊など様々に指摘されているが<sup>28)</sup>、まだ定説はない。ギリシア世界では、その後二度と宮殿文明が現れることがなかった。王朝を中心とした宮殿文明がその社会にとって適合的であれば、例えば中国文明がそうであるように、王朝が何度滅ぼうとも、あるいは支配民族が変わろうとも、再び新たな「帝国」が形成されるものである。分厚い城壁に守られた宮殿が再建されなかったということは、宮殿を中心とした垂直的な社会構造が、ギリシア世界にもはや必要とされなくなっていったということを裏書きしているのではないだろうか。

いずれにしても紀元前11世紀になると各地でミケーネ文明の痕跡は衰微し、ギリシアは考古学的証拠の極端に乏しい時代をむかえる。この時代が「暗黒時代」<sup>29)</sup>と呼ばれるゆえんである。記録は消滅し、壮大な建築物は失われ、人口はミケーネ文明全盛期のおそらく5分の1以下に落ち込んだと言われている。中央政府は消滅し、それとともに遠隔貿易とよく整備された農耕制度も、ほとんど壊滅した。農業生産力は劇的に低下し、かろうじて自給自足できる農耕生活に戻ってしまった。地方ボスと豪族が各地の要塞化された小部落を勢力圏に取りこもうとして争う群雄割拠の時代が始まったのである。わずかにのこされた住民はもはや定住民ではなく、脅威があれば移住することが多かった<sup>30)</sup>。鉄器文化がギリシアに登場するのはこの時代であるが<sup>31)</sup>、ミケーネ時代の書き言葉である線文字B、政治・社会・経済組織、オリエント世界の伝統と共有する戦争の形態などは、ポリス形成後のギリシアにはほとんど伝わらなかったと言われている。その全てがギリシア各地の宮殿の突

然の崩壊とともに消滅したのである。

## 第2節 ホメロスの描いたトロイア戦争

### 1. 全軍集会

すでに述べたようにホメロスの英雄叙事詩が書かれたのは、紀元前 750 年前後と言われている。古代オリンピックの起源と言われる、各ポリスの代表選手が集まったオリンピアの地での第 1 回競技会が開催されたのが紀元前 776 年のことであるから、ポリスと呼ばれる都市国家が形成されていく時代にホメロスはその叙事詩を書いていたことになる。

ホメロスの叙事詩は、ミケーネ時代のトロイア戦争についての伝承をもとにしているが、トロイア戦争は、紀元前 1350 年頃に起きたと考えられているので、ホメロスが執筆するまでには暗黒時代を挟んで 600 年ほどの月日が流れていることになる。したがって、ホメロスがそこで描いた権力構造、いわゆる「ホメロスの王政」<sup>32)</sup> は、もはや官僚制を備えたオリエンタ的な専制国家のそれではなかったし、当然のことながら、アガメムノンもミケーネの専制君主ではなかった。『イリアス』で描かれているギリシア軍とその指導者たちの模様は、まさにホメロスが生きていた時代、すなわちポリス形成期のギリシアを反映していたと考えられる。そして、それはミケーネの専制国家の有り様と驚くほどの対照を見せているのである。まずは、そこに描かれている全軍集会の様子を見てみよう。

『イリアス』の第 1 歌は、ギリシア軍の総大将アガメムノンと英雄アキレウスとのいさかいの原因を描いている箇所であるが、アガメムノンは、捕虜として囚われていた敵方（トロイア）のアポロン神官の娘を自分の愛妾にしていた。娘を奪われたトロイアのアポロン神官は、莫大な身代金を持参して娘の身請けを乞うたが、アガメムノンはそれに応じず、かえって侮辱を加えて追い返した。このことがアポロンの怒りをかい、アポロンの矢でギリシア軍の中に疫病が流行り、多くの兵士が死んでいった。これを見たアキレウス

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

は、全軍集会の開催を提議し、事態を収拾しようとする。

「9日にわたり神の矢は陣中隈なく飛び交ったが、10日目になってアキレウスが発議し、全軍の集会をもよおさせた。…一同が参集し集合し終えたと、脚速きアキレウスは衆の間に立ち上がって弁じていうには」<sup>33)</sup>  
（『イリアス』第1歌）

まず注目すべき点は、アキレウスが、陣中に生じた、しかも総大将の振る舞いを原因とする問題に対処するにあたって、全軍集会の開催という手段を取ったことである。もしホメロスの描くギリシア軍総大将アガメムノンが、ミケーネ文明のオリエント風専制国家の王であったとするならば、その行動や決定、そしてそれらの結果への対処を巡って臣下が意見することなどそもそもありえないし、ましてや全軍を招集する会議を開催することなど想像だにできないことだろう。専制君主にとって、彼の臣下や兵たちは彼の所有物でしかありえないからである。しかも、アガメムノンは、全軍集会での激論の末、結局神官の娘を解放することになった。もちろん、全軍集会での議論を受けてアガメムノン自身がその意向を受け入れ譲歩したという形であるが、いずれにしても、全軍集会が、総大将アガメムノンの行動を左右しているのである。全軍集会の決定が王の行動を規制できるのだとすれば、むしろ全軍集会こそが、最終的な決定権力、すなわち主権を保持する団体だということになる。そこには、オリエント風専制国家とはまったく異なる政治制度が立ち上がっていることが伺える。

『イリアス』からもうひとつの興味深い事例を引いておこう。トロイア戦争は10年目に入り、膠着状態の中でギリシア軍の中にも厭戦ムードが高まっていた。そのような状況下で、ゼウスはアガメムノンに惑わしの「夢」を送る。それは、「トロイア方の悲運は、ゼウスの神慮によってすでに定まっている」<sup>34)</sup> というもので、すぐにでもゼウスの加担によってトロイアは陥落するだろうという内容であった。そこでアガメムノンは、兵士を鼓舞するため

に、自ら全軍集会を開くことを決める。しかしその前に、アガメムノンは全軍集会での議論を誘導すべく、少数の有力者に相談をもちかけるのである。

「アガメムノンは全軍集会に先立ち、錚々たる元老たちの評定を、ピュロス生まれの王ネストルの船の傍らで催した。元老たちを集めると、巧みにめぐらした謀りごとを示していうには、

『兵士らの心を試すために、漕ぎ手を揃えた軍船とともにここを撤収しようと言い出してみよう。そのとき方々には、各自口々にわしの提案をとどめる発言をしてもらいたい』<sup>35)</sup> (『イリアス』第2歌)

言うまでもないことだが、王たちのこのような行動は、オリエント風専制国家では決して見ることができない。これは、言葉による説得を通じて議論を誘導することでしか望むべき結論を得られず、しかもその説得の対象は戦争に参加しているすべての将兵であるということを、王たちが痛感していることを明確に表している。そして、彼らが説得しようとしている兵士たちの様子はどうかというと、これも同様に、神的王を前にした畏敬や恐怖の態度を全く見せない。ホメロスは、全軍集会に兵士たちが集まる様子を次のように書き表している。

「兵士らが息せき切って駆けつける有様は、蜜蜂の群が薺めきつつ、岩の凹みから次々に繰り出して、葡萄の房さながらに一団となり、春の花に舞い降りながら、こなたかなたに群れをなして飛び交うのにも似ていた。そのように夥しい数の兵士の群れが、船から陣屋から隊伍を組んで、見下ろせば遙かに続く浜辺の前を、集合の場をめざして進む。...かくて兵士の集合は終わったが、集会場は騒然として、兵士らが座を占めるにつれて足元の大地は呻き、あたり一面は喧騒の場と化した。9人の伝令使が、なんとか兵士らがわめき騒ぐのをとどめ、ゼウスの寵に恵まれた王たちの言葉に耳を傾けさせようと、大声を呼ばわりつつ一同を制して

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

廻る。ようやくにして兵士らは腰をおろし、制止をうけて叫ぶのをやめ、それぞれの席についた。」<sup>36)</sup>（『イリアス』第2歌）

集まった兵士たちは、口々に何事かをわめき騒いでいる。伝令使が必死になって「王たちの言葉に耳を傾けさせようと、大声を呼ばわりつつ一同を制して廻る」ことなしには、決して静まろうとはしない。これが専制君主を前にした兵士たちの態度ではないことは明白であろう。全軍集会についての以上の2つの例をみるかぎり、ここにはミケーネの諸王朝を特徴づけていた垂直的な社会構造がほぼ失われていることがわかる。王たちと兵士たちの関係は、ただ前者が神的な権威をもって命令を下し、後者がそれに唯々諾々として従うというものではなくなっている。両者の関係は、より対等で、つまりより水平的なものとなっており、さらに言えば、両者ともにそのことを十分に意識している。つまり、前者は言葉により説得する側であり、後者は説得を受けて最終的な判断を下す側であるということ。

アガメムノンが開催した全軍集会が進むにつれて、私たちはさらに劇的な光景を目の当たりにすることになる。

## 2. 口の達者な一兵卒

將兵たちを前にして、アガメムノンは軍勢の士気を試すために撤退を提議した。厭戦気分が強かった兵士たちは浮き足立ち、ただちにギリシアへの帰国の準備にとりかかろうとして大混乱に陥った。それを見た知将オデュッセウスは、アガメムノンから笏杖を借り受け、浮き足立った一般兵士や貴族たちを見事な采配でもって集会の場に呼び戻した。再び集まった將兵たちがおとなしく控えている中で、ただひとり「口汚く罵りつづけてやまなかった」<sup>37)</sup>者がいる。一兵卒のテルシテスである。テルシテスが大声でアガメムノンを罵っているには、

「アトレウスの子よ、一体何がまだ不足だというので、またしても苦情



を並べておられるのか。…己の愛欲をみたすために、ひとり気儘に囲えるような若い女を望むのか。いやしくも将たるものが、アカイアの男の子らを危難にさらすようなことがあってよいものではない。さておぬしたち、腰抜けの恥さらしどもよ、おぬしらはもはやアカイアの男ではない。アカイアの女子たちおなこと呼んでやるが、なんとしても船に乗って故国に帰り、この男はトロイエの地に置き去りにして、己れの分け前を貪らしておこうではないか。そこで初めてこの男も、われら兵卒ですら彼にとってなんらかの役に立つのか立たぬのかを悟ることであろうよ。」<sup>38)</sup>  
（『イリアス』第2歌）

『イリアス』で何度か描かれる全軍集会の場における、一般兵士からの唯一の発言がこれである。この発言は、彼の「姿の醜怪さは他に類がなく」という容貌と同じように、あまりにも奇怪に聞こえる。総大将アガメムノンを「この男」呼ばわりし、彼の食欲さや傲慢さを容赦なく批判し、さらに同輩の兵士たちを「アカイアの女子たちおなこ」と呼んで挑発し、彼らが思い切って帰国してしまえば、総大将のアガメムノンもようやく自分の立場を自覚するであろうとまで言っているのである。たとえその内容にいくらかの筋が通っていようと、王に向けた一兵卒の発言としては、異常に無礼であることには間違いない。では、この発言を受けた並み居る王たちや英雄たちは、テルシテスをすぐさま処断したのであろうか。決してそうではない。

この発言というよりも暴言に対してすぐに反応したのはオデュッセウスであった。

「間髪いれず勇将オデュッセウスが彼に近づいてぐっと睨まえ、激しい言葉で叱りつけていうには、

『テルシテスよ、お前はいかにも口は達者のものだ、言葉遣いを弁えぬ奴だ。口を慎み、王侯に向かって単身喧嘩を売ろうなどという気を起こすなよ。アトレウス家の二兄弟に従ってイリオス城下に攻め寄せた数あ

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

る兵士の中にも、お前より下賤な者は一人もおらぬぞ。』<sup>39)</sup>（『イリアス』第2歌）

そう言って手に持つ笏杖でテルシテスの両肩を打ち据えた。並み居る兵士たちは、普段から傍若無人で悪口雑言を吐くテルシテスのことを知っているので、彼がオデュッセウスに打擲ちようちやくされ「痛みを堪えつつ途方にくれた面持ちで涙を拭う…姿を見ては陽気に笑い興じ」<sup>40)</sup>、そうしてオデュッセウスは見事に場を鎮静化させたのである。

ここで注目すべき点は、オデュッセウスは決してテルシテスが発言したというそのことをもって彼を打ち据え黙らせたわけではないということである。オデュッセウスが問題にしているのは、あくまでもテルシテスの乱暴な言葉遣いであり、有力者に対する不遜な態度でしかない。アガ멤ノンの意を受けたオデュッセウスは、集会の雰囲気戦争継続に向けてコントロールする必要があったが、しかし同時に、強権的に反対意見を封殺することはできないということも知っていた。だからこそオデュッセウスは、テルシテスの発言そのものではなく、言葉遣いをことさらにやり玉に挙げ、それを正当に懲罰するという姿勢を維持することで、反対意見の封殺に成功したのである。

この一連の騒動と、それを収めたオデュッセウスのいささか手の込んだやり口において、『イリアス』における王と兵士の関係がより鮮明に表れている。すなわち、王侯貴族たちは一般兵士にとって敬意を払うべき対象ではあるものの、それは無条件かつ絶対的なものではない。それはオリент風の専制国家における君主とその臣下という関係ではないのである。もしそこに専制的な身分関係があるならば、そこには当然のことながら絶対的な上下関係があり、下位の者が自由に上位の者を批判する余地はない。テルシテスは、発言したというその事実をもってその場で即座に斬り殺されていたであろう。そして、繰り返しになるが、そもそも戦争を継続するか撤退するかを決めるために全将兵を集めた集会を開く必要はなかったであろう。だが、アガ멤ノンら有力者が戦争を継続するために全軍集会を開く必要に迫られており、

そしてそこでは一般兵士に発言が許されているということは、一般兵士らはミケーネ諸王朝におけるような王侯貴族の隷属民ではなく、むしろ王侯貴族と同じ発言権を有する自由民であることを示唆している。端的に言って、そこにはすでに「民主的な社会構造」<sup>41)</sup>が成立していたのである。

しかしだからといって、ホメロスが描き出した社会構造が、私たちのよく知る古典期アテナイのような、完全な民主社会であったということではない。先述のように、ホメロスの時代は、ポリス社会の形成期であって、アテナイ・デモクラシーの成熟にはそれから約 300 年を要するのである。たとえそこに自由で平等な関係が垣間見えようとも、『イリアス』における王侯貴族と一般兵士たる民衆との間には、やはりその扱われ方に少なくない差が見て取れる。それは、「トロイアの地から撤収し故国ギリシアに帰国しようではないか」というアガ멤ノンの提案に対し、将兵が動揺し、全軍が散開し始めたのを見た時の、オデュッセウスの対応によく表れている。

オデュッセウスは、王侯貴族に対しては、「ひとりひとりに近寄って、言葉やさしく引き止め」、「おぬしにも似合わぬことをするではないか、もとよりおぬしを臆病者扱いして脅かしたりしてはならぬことは承知しているが、おぬしがまずまず腰を落ち着け、兵士らを座につかせてくれ」<sup>42)</sup>と丁寧に説得している。これに対して、「喚きちらしている兵卒に出会うと、そのつど笏で擲り叱りつけ」て、「なんたるざまじゃ。おとなしく坐って目上の者のいうことを聴け。戦う力もなく身を守る術を知らぬ柔弱者めが、お前などは合戦の場であれ評定の席であれ、ものの数にも入らぬ奴じゃ」<sup>43)</sup>と完全に上位者が下位者にする仕方でもって叱りつけているのである。

これは形成期にあった諸ポリスは、どこでも王政ないし貴族政であったということに対応しているのであろう。ほとんどのポリスは、まず王や貴族を戴くポリスとして成立し、やがて重装歩兵ポリス、そして最終的に古典期における民主政ポリスというように、段階を踏み、長い時間をかけて民主化の過程をたどった。しかし同時に、『イリアス』における「ホメロスの王政」には、後の民主政ポリスにおいて結実する社会制度のいくつかを見ることがも

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

できる。

例えば、先にアガメムノンが「全軍集会に先立ち、錚々たる元老たちの評定」を開催していることに触れたが、有力者たる名門貴族からなるこの「評議会」<sup>プーレー</sup>は、王を補佐するとともにその権利を制限するものであった。共同体に関するあらゆる重要事は評議会に諮らなければならなかったし、さらに異常事態にあたっては、兵士たちからなる自由人総会すなわち「民会」<sup>アゴレー</sup>にも相談し、その賛同を得る必要があった<sup>44)</sup>。アガメムノンは、民会すなわち全軍集会の前に評議会を開き、全軍集会の議論の方向性について貴族たちと打ち合わせたが、ここには、民会で議論すべきことをあらかじめ先議していた、古典期アテナイの500人評議会の原型を見ることができよう。また、これまで見てきたように、アガメムノンら「王」<sup>バシレウス</sup><sup>45)</sup>は、ミケーネ文明の諸王国の「王」<sup>ワナカ</sup>のような神的権威を有する専制君主ではなく、あくまでも共同体成員の中の有力者の一人であり、いわば「同等者の中の第一人者」(*primus inter pares*)<sup>46)</sup>にすぎなかった。つまり、ホメロスの叙述世界での「王」<sup>バシレウス</sup>は、村共同体の部族の長の中でもっとも尊敬されている者にすぎなかったのである<sup>47)</sup>。そして、ポリスの民主化の過程において、バシレウスは、軍事や祭祀などに特化された行政職へと変化していくことになる。

### 第3節 戦士たちの共同体

#### 1. 自由農民の成立

前節で、『イリアス』に描かれている一般兵士は、王侯貴族の隷属民ではなく、むしろ彼らと対等の発言権を持つ自由民であったということを述べた。そして、王たちも、専制君主ではなく、あくまでも共同体の中の第一人者にすぎなかったことを見てきた。これから見ていくように、このような「ホメロスの王政」を可能にしたのは、第一に、ポリス形成期のギリシアにおける農業形態であった。兵士たちは平時には農民であったのだが、彼らは、王や貴族の土地を耕す隷属民でも小作人でもなく、耕作地を私有する自由農民で

あったのだ。

ミケーネ文明の崩壊とともに、ドーリア人をはじめとする諸民族の移動の波がギリシア世界を襲い、ミケーネ文明の社会的遺制のほとんどは洗い流された<sup>48)</sup>。第1節で見たように、記録は消滅し、壮大な建築物は失われ、人口は全盛期のおよそ5分の1以下にまで減少したと言われている。農民はミケーネの諸王朝の貢納制から解放されたものの、同時に整備された農耕制度のほとんどが壊滅し、自給自足の生活に後戻りした<sup>49)</sup>。王権の弱体化あるいは消滅により共同体規制は弛緩し、耕地の共有や共同耕作は行われなくなった。自給自足体制のもとで、生産は個別に行われ、土地が私有されるようになる。というのも、時代が下るにつれて、土地の集団占拠による新たな村共同体が形成されていったが、その際に、新たに獲得された土地は、各世帯に分割地として配分されたからである。

ホメロスは『オデュッセイア』で、この間の事情を偲ばせることを書いている。

「この民はむかしヒュウペレイアの広い国土に、暴戾なキュクロプス一族に隣って住んでいたが、力に勝るキュクロプス族は、彼らに害を加えてやまなかった。そこで、その容姿神にも劣らぬナウシトオスが、民をその地から連れ出し、刻苦して生計を立てる人間たちから遠く離れて、ステリオの地に住ませた。町に城壁をめぐらせて住居を建て、神々の神殿を建立し、農地を配分した。」<sup>50)</sup>（『オデュッセイア』第6歌、傍点引用者）

ここで神話のように語られているのは、実際のポリス形成のあらましであろうと考えられる。暴虐な一つ目の巨人族になぞらえられたのは、異民族であろうか。いずれにせよ、彼らとの接触を避けた人びとは、王に導かれて新たな土地を「発見」し、占拠した。そして、町の周囲に城壁をめぐらして、住居および神殿を建て、農地を配分したのである。共同体の成員それぞれに

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

私有地として分配されたこの土地は、籤<sup>くじ</sup>引きで分けられた土地という意味で、「クレーロス」（klēros）あるいは「クラーロス」（klāros）と呼ばれた<sup>51)</sup>。それは小麦などの穀物や、オリーブやぶどうなどの果樹が栽培される10エーカー（4ヘクタール）ほどの耕地であり、土地の境界を示す石がおかれ、果樹園には垣根や溝がめぐらされていた<sup>52)</sup>。

『イリアス』にもクレーロスについて言及されている場面がある。トロイア軍の将ヘクトールが友軍を励まして次のように述べる箇所である。

「国を護って死ぬのは決して不名誉なことではないし、アカイア勢が船と共に国に引き上げさえすれば、その者の死後、妻子も無事、また家も<sup>クレーロス</sup>土地もそのまま残るのだからな。」<sup>53)</sup>（『イリアス』第15歌）

ホメロスの英雄叙事詩の世界がポリスの形成過程を反映しているということとをすでに述べたが、ポリスの特徴づける土地の私有化がホメロスの時代に確立していたことを、トロイア軍の将ヘクトールの言は明示している。そしてギリシア人にとって、私有地すなわちクレーロスの所有こそが、自由かつ独立した人格を有していることの証であり、したがって、王侯貴族と対等な立場で発言することを可能にするもののひとつであった。

私有地をもつに至った古代ギリシアの農民たちが、王侯貴族から経済的および政治的に自立することを可能にしたのは、ギリシア固有の風土であった。すでに述べたように、大河のほとりに成立したエジプトやメソポタミアなどの古代オリエン特世界の帝国では、灌漑農業が行われていた。灌漑農業は、大規模な土木事業によって作られた運河から水を広大な平野に引き入れることによってはじめて可能となる農業である。この大土木事業こそが専制的な権力を必要とし、また可能にしたのであった。しかし、山が湾に迫り、その隙間にかろうじて盆地や平野が広がるギリシアでは、農業用水も降雨に頼るしかなかったのである。歴史家のヘロドトスが、エジプト人の言葉として書き残している話は、当時のオリエン特世界とギリシアとの対比を明らかにし

ていて興味深い。

「というのは、ギリシアの国土はことごとくその灌漑はエジプトのように河によらず、雨を俟つということを知ったエジプト人が、ギリシア人はいつかきつと大変な当てはずれをして恐ろしい飢饉に襲われるであろう、と言ったことがあるからである。その言葉の意味は、もし神がギリシアに雨をふらせようとせず旱魃を起こされたならば、ギリシア人は飢饉の厄に見舞われるであろう、彼らには天帝ゼウスから賜る以外には水を得る当てがないから、というのである。」<sup>54)</sup>（『歴史』巻2）

しかし、エジプト人のかかる杞憂とは逆に、ギリシア農民の経済的自立、そして政治的自立を支えていたのは、まさにこの天水に頼る農業形態であった。小麦や大麦やぶどう、そして、ギリシア特産の換金作物であったオリーブを育てたのは冬季に降る雨であり、雨水を溜めて湧き出る泉が、灌漑用の水や飲料水の源となった。村落は泉の周囲に発達した。乾燥したオリエント世界とは異なり、ギリシアでは大規模灌漑のための運河を必要とせず、したがってそのための強大な王権も必要としなかった。農業の生産性を向上させるために必要だったのは、私有地を増やし、家族による個別労働に気を配り、泉から水をひく溝を整備し、耕地の畝の深さを適切にすることであり、そして、種蒔きの時期について天候をにらみながら考慮し、剪定を巧みにおこなうなど、植物の成長に対する技術的な配慮を忘れないことであった<sup>55)</sup>。

したがって、ポリス形成期および形成前夜のギリシアの農民は、専制君主の土地を耕す隷属民ではなく、中世社会のように貴族の土地を借りて耕す農奴や小作人でもなく、クレーロスという分割地を得て経済的政治的に自立していた独立自営農民であった。この時代にあつては、分割地を持つ農民であるということが、自由民であるということであった。つまり、土地の私有こそが、農民を自由民にし、後になって政治的自由の条件となったのである。アリストテレスは、ポリスは「一つ以上の村から出来て完成した共同体」<sup>56)</sup>

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

であると述べているが、そうした村共同体は、何よりもまずこうした自由農民の共同体であったのである。

## 2. 平等な「兄弟」たち

前項で見たように、ポリス形成前夜におけるギリシア農民は、クレーロスという分割地を所有しており、また強大な王権の下にいたることもなかったもので、経済的かつ政治的に自由であった。それゆえ、暗黒時代の村共同体にとっての最大の課題は、外敵からの「安全」の確保であった。彼らが生産活動を持続させ、そうすることで自由な身分を維持するためには、彼らの生活と生産の場を、海賊や隣接する他の共同体の攻撃から、自分たちの手で守らなければならなかったのである。そうした安全が確保されていなかった時代のギリシア世界のことを、トゥキディデスは以下のように描写している。

「当時は交易も成立しておらず、陸路でも海路でも恐怖なしには相互に交流できなかったのも、各人は生存に必要なだけ自分の土地から収穫し、財産の余剰は持たず、土地に果樹も植えはしなかった。また彼らには城壁が欠如していたため、いつでも誰か外部の者が襲来して、略奪し去る恐れがあったのである。」<sup>57)</sup>（トゥキディデス『歴史』第1巻）

「城壁が欠如していたため」とあるように、トゥキディデスはポリス形成前の暗黒時代の様子を書いていることが分かる。したがって、農民たちは、常に外敵に対する注意を怠らず、日常的に武器を携帯していた。

「要するに、その当時は居住地が無防備で、相互間の交通も安全でなかったため、ギリシア全体が武器を携帯していた。そして、あたかも異民族バルバロイのように、武器を携帯する生活を日常茶飯事としていたのである。今日なおギリシアの上記地域で、かかる風習が守られている事実は、かつて同様の生活様式が全域に普及していたことの証拠である。」<sup>58)</sup>（トゥキ



ディダス『歴史』第1巻）

農民たちは、自分たちの共同体を防衛するために、みずから自警団を立ち上げた。これがフラトリア（phratry, 兄弟団）である。彼らが王や貴族の土地を耕す存在であれば、土地の安全は王の軍隊や貴族の私兵によって保障されたであろう。しかし、暗黒時代において国民の安全を護ってくれるような国家は未成立であり、貴族はただ村の有力者であるにすぎなかった。したがって、自由民である農民たちは、みずから武器を取り、村共同体の安全を担保するために、「血ではなく、生計の共同」を基礎とする「人為的な団体形成」を行ったのである<sup>59)</sup>。フラトリアは、その名（brotherhood）が示すように、擬似種族的な団体であったが、それは、血縁を中心とするというよりも、共同体の防衛という必要に迫られて形成された「戦士の兄弟団」(brotherhood of warriors)であった<sup>60)</sup>。その起源が暗黒時代にあることについては、フォレストが「フラトリアは、国家組織がほとんど存在しなかったところのドーリア人侵入後の無秩序の時代」<sup>61)</sup>に生まれたと述べ、ウェーバーも同様に、フラトリアはドーリア人の移動という暗黒時代の「占領地または外敵の脅威をうけた地域における一般自由農民の慣行を起源とする」<sup>62)</sup>ものであり、「土地所有者が戦士共同体として組織された発展段階、かれらの土地が《槍をもって獲得されたもの》と考えられた発展段階」<sup>63)</sup>に成立したと述べている。いずれにせよフラトリアは、分割地所有農民が武装自弁して村共同体防衛のために組織した戦士団であった。そもそも前述のように、当時のギリシア世界には常時武器を携帯する伝統があったため、武装自弁の戦士団の設立は、自然に行われたと考えることができよう。

『イリアス』においても、このフラトリア（兄弟団）への言及がある。まずは老将ネストルが、軍団の構成についてアガメムノンに忠告を与えるシーンである。

「アガメムノンよ、兵士らを部族ごとフラトリアごとに分けるがよい。

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

フラトリアはフラトリアを、部族は部族を援助できるように。もし貴下  
がそのとおり実行し、またアカイア人がそれに従ったなら、指揮者たち  
や兵士のうちで、誰が卑怯か勇敢か、貴下はすぐに判別できよう。〔各  
集団がそれぞれ〕自らのために戦うことになるからだ。』<sup>64)</sup>（『イリアス』  
第2歌）

このネストルの忠告は、ギリシア軍の動員が、部族単位とフラトリア単位  
であったことを明らかにしている。そして、当時のギリシア人にとって、フ  
ラトリアに属していることは共同体の構成員として必須の資格であったこと  
が、ネストルの以下の発言から明らかになる。

「そなたは筋の通った話しぶりで、アルゴス勢の王侯たちに、まことに  
もっともな忠言をしてくれたのであるが、ここで憚りながらそなたより  
も年も上であるわたしがざっくばらんに考えを述べ、締め括りをつける  
ことを許してもらいたい。わしの意見を軽んずる者は一人もおらぬはず、  
アガ멤ノン王すらさようなことをなさるまい。厭うべき内輪もめなど  
望むものは、<sup>フラトリア</sup>の<sup>一員</sup>でもなく、<sup>法</sup>も持たず、<sup>ヘステイア</sup>竈も持たない  
奴だ。』<sup>65)</sup>（『イリアス』第9歌、傍点引用者）

戦争中に「厭うべき内輪もめ」すなわちギリシア人同士の結束を損なうと  
いう最悪な利敵行為をする者は、当然のことながら、共同体から排除されな  
ければならない。そして、ホメロスにとって、共同体に属していないことを  
端的に告げる表現は、フラトリア（兄弟団）の一員ではないということだっ  
たのである。共同体に属しているということは、すなわちフラトリアに属し  
ているということを意味するというこの古代ギリシア的観念は、古典期にお  
いても維持されていた。というのも、アリストテレスが、まさしくこのネス  
トルの発言を、「人間は自然にポリス的（政治的）動物である」とする『政治学』  
のもっとも重要な箇所ので引用しているからである。

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

「ポリスは自然にあるものの一つであるということ、また人間は自然にポリス的動物（zoon politicon）であるということ、また偶然によってではなく、自然によってポリスをなさぬものは劣悪な人間であるか、あるいは人間より優れた者であるかのいずれかであるということである、前者はホメロスによって、

『フラトリアの一員でもなく、法も持たず、竈も持たない奴だ』  
と非難された人間のようなものである。」<sup>66)</sup>（アリストテレス『政治学』第1巻第2章）

私たちが前節で指摘したのは、ある意味ではホメロスの<sup>アナクロニズム</sup>時代錯誤であったのだが、このフラトリアへの言及は、その極めつけと言えるであろう。すでに論じたように、フラトリアはまさしくミケーネ文明崩壊後の暗黒時代において、その荒涼とした社会環境を背景に誕生した農民の戦士団だからである。だが、フラトリアは、上記のアリストテレスの引用において明らかなように、古代ギリシアにおける共同体の核となっていく。実際、フラトリアは、人びとが「<sup>シュノイクスモス</sup>集 住」し、村共同体を解体しポリスという都市国家のもとに再結集した後でも、重要な団体として維持されていく。それは、まずもって市民団を構成する<sup>フューレー</sup>各部族の「地域的小区分で、行政的機能と祭祀的機能をもったもの」<sup>67)</sup>であり、そして何よりも、市民資格の認定という、市民共同体の根幹をなす権能を握っていたのである。

そして、このフラトリアこそが、とりわけポリス成立以前の村共同体における構成員間の平等な関係性の鍵でもある。私たちは前節において『イリアス』における「ホメロスの王政」の社会構造、すなわち王と一般兵士とが形式上は対等な発言権を有する社会構造を見た。こうした「民主的構造」の成立は、一方で、前項で見たように、一般兵士らが自由民すなわち耕作地を私有する自由農民であり、経済的かつ政治的に独立していたことに依拠しているが、他方で、共同体そのものがそうした自由農民がみずから武装して形成した「戦士共同体」であったということにも求められる。すなわち、ポリス

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

形成期の村共同体において、生産力の多寡による有力者ないし貴族と平民との間の階層分化が生じていたとしても、それは前者の武力の独占による身分固定的な支配被支配関係までに発展することがなかったのである。そしてその傾向は、重装歩兵による集団戦術が浸透するにつれて、より確固たるものとなっていった。貴族と農民兵士らは、一致団結して村共同体の防衛に責任を持つ「兄弟たち<sup>フラトリア</sup>」として、比較的に平等な関係性を維持していたといえる。あの一兵卒テルシテスの発言は、したがって、私たちが思うほどには異常でも非常識でもなかったのである。

## 結びに代えて

ペロポネソス半島の内陸部に位置するスパルタが農業を中心とする内陸都市であったのに対し、アテナイは沿岸都市であった。つまり、自給自足のための農業だけでなく、余剰生産物としてのオリーブや陶器を輸出するなどして、外国との交易を盛んに行っており、また、サラミスの海戦を主導したように、強大な海軍力を擁していた。だが、アテナイ市街は、アテナイの外港ピレウスから10キロメートルほど内陸側に建てられていた。10キロメートルは、だいたい芝浦から新宿までの距離である。なぜ、あえて港から離れた場所にポリスを建設したのかというと、そこにはポリス形成のそもそもの理由が密接に関わっている。前節で、ポリス形成期の農民たちが武装し戦士団を立ち上げたことに触れたが、村共同体にとっての外敵は、他の村共同体だけではなく、特に沿岸部に住む人々にとって、最大の脅威は海賊であったのである。トゥキディデスはその事情を以下のように描いている。

「というのは、古い時代にはギリシア人も、また大陸の沿岸や島々に住む異民族も、船々での相互の往来が頻繁になり始めると、最有力者たちが首領となって、自分自身の利益のためや弱者を養うために、海賊業に転じていたからである。そして城壁のない都市や村落に分かれて住んで

いる人々を襲っては略奪し、そこから生活費の大部分を得ていたのである。当時はなお、そのような行為は恥辱にはならず、むしろ幾分かは名誉をもたらすものであった。その証拠に、今日でも本土の住民の一部は、かかる行為に成功することを名誉と考えているし、また昔の詩人たちも、どこから船で訪れた者に対して、いつも同様に、海賊であるか否かと質問させているが、尋ねられた相手も、その職業を否認せず、また尋ねることを任務とする者も、それを非難する気持ちはないように描いている。」<sup>(68)</sup>（トゥキディデス『歴史』第1巻）

村共同体同士の「恒常的な戦争状態」（ウェーバー）と、度重なる海賊の襲来は、人びとの「集住」<sup>シュノイクスモス</sup>を促した。つまり、敵襲の際に避難し立てこもることを可能とする神殿をアクロポリスの丘（アクロポリスの原義は「高所の城砦」である）の上に建て、その麓に集団で移住し、居住区を城壁で囲ったのである。ポリスの原義がまさしく「城砦」であることから明らかなように、ポリスとは人びとの財産および安全の確保と防衛のために建設された都市であった。そして、だからこそ集住はフラトリアすなわち戦士共同体の結集という形で行われたのである。

だが、ポリスの基礎がフラトリアにあるとはいえ、そのことが直接的に市民間の政治的平等を生み出したわけではない。すでに述べたように、ポリスの形成から民主政ポリスの成立まではおよそ300年を要しており、それはアテナイとて例外ではない。アテナイもまた貴族政ポリスとして成立し、国政は貴族により牛耳られ、貴族間の党派抗争が繰り返られていた。また、紀元前6世紀の半ばには、民衆を自派に取り入れたペイシストラトス親子による僭主政が樹立さえしていた。約半世紀に及んだペイシストラトス家の僭主政が打倒された後、民衆派の指導者となったクレイステネスによって大規模な行政改革が行われたが、それこそがアテナイ民主政の基盤となったのである。

元来、アテナイの最重要政治機関は400人評議会であり、貴族の牙城であった。同評議会は、貴族の支配の土台となっていた血縁関係にもとづく4部族

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

からそれぞれ 100 人ずつの代表が送られることで成立していたからである。クレステネスは、まずこの 4 部族を解体した。そして、都市部、内陸部、および沿岸部の 3 地域（これは同時に党派抗争の源でもあった）を 139 の<sup>デーモス</sup>地区に分割し、すべての市民をこのデーモスに登録させた。さらに、デーモスを地域ごとに 10 の組に統合し、そして 3 地域のそれぞれの組を一つずつ合わせて 1 つの部族を誕生させた。したがって、新たに人工的に編成された 10 の部族が誕生したことになる。アテナイの新たな最重要政治機関は、この 10 部族からそれぞれ 50 人を選出することで成立する 500 人評議会となった。すなわち、すべての市民が登録されているデーモスが政治的基礎単位となったことで、市民の政治参加の機会が飛躍的に増大したのである。アテナイの民主政は、全市民が参加する民会に政治権力が移行していくことで、さらにその洗練を極めていくことになる。

アテナイの政治的および軍事的な最小構成単位は、いまやデーモスとなったが、しかし、クレステネスはフラトリアには一切手を付けなかった。ポリス成立から連綿として続いていたフラトリアという人的結合団体は、構成原理を完全に異にするデーモスという制度が導入された後でも変わることなく生き続けたのである。もはやそこには軍事的な色彩を見出すことはできないが、各フラトリアはそれぞれ独自の共有財産と神官を持ち、成員総会を開催し新規加入の可否を判断するなど、自律した中間団体としての地位を維持していた。そればかりか、フラトリアへの加入は、デーモスへの加入のしたがつて市民登録の必要条件とみなされていた。「フラトリア成員ならざる市民は、そもそも存在しない」<sup>(69)</sup> のである。デーモスとフラトリア、すなわち市民であることとかつての戦士団の一員であることは、アテナイ人のアイデンティティにとっていわば同心円上に重なるものであった。このことは、フラトリアの理念が、つまりそもそものポリスの形成原理である共同体の防衛に平等に責任を負うということが、その団体としての意義を失った後でもなお存続し、そしてそれがクレステネスの改革によって古典期アテナイに実現した<sup>イセゴリア</sup>発言の平等、すなわち自由で独立した市民の間の<sup>イソノミア</sup>政治的平等の理念的

ルーツのひとつとなっていたことを示唆するであろう。いずれにせよ、少なくともアテナイ市民は、自分たちが「兄弟たち」<sup>フラトリア</sup>の一員であることを、片時も忘れることがなかったのである。

## 注

- 1) ヘロドトス『歴史 下』（松平千秋訳、岩波文庫、1972年）、66頁。
- 2) 同書、67頁。
- 3) 同書、68頁。
- 4) 同書、69頁。
- 5) 同書、85頁。
- 6) ヘロドトス『歴史 中』（松平千秋訳、岩波文庫、1972年）、165頁。一部改訳。
- 7) 高津春繁『ホメロス叙事詩の世界』（岩波新書、1966年）、3頁。
- 8) パウサニ阿斯『ギリシア案内記 下』（岩波文庫、1992年）、83頁。
- 9) エルンスト・マイヤー「後記」『古代への情熱—シュリーマン自伝—』、176頁。
- 10) シュリーマン『古代への情熱—シュリーマン自伝—』（関楠生訳、新潮文庫、1977年）、60頁。
- 11) ホメロス『イリアス 上』（松平千秋訳、岩波文庫、1992年）、334頁。
- 12) 1876年にシュリーマンは、ライオンの門を入ってすぐのところにある円形墳墓を発掘した。ミケーネのほかの墓と違って盗掘を受けておらず、黄金製のものを含む大量の副葬品が発見された。発見された財宝のあまりの見事さに、シュリーマンはアガメムノンの墓を発見したと思い込んで、ギリシア国王にそう電報で知らせたという有名なエピソードがある。しかし、その後の研究で、この墓はトロイア戦争よりも以前のものであることが明らかになっている。発見された黄金の合計は14キロにも及び、有名な「アガメムノンのマスク」も円形墓Aの副葬品の一つである。財宝の大部分は現在、アテネの国立考古学博物館のミケーネ室に展示されている。
- 13) 桜井万里子・木村凌二『世界の歴史⑤ ギリシアとローマ』（中央公論社（中公文庫）、2010年、32-33頁参照。
- 14) ジョン・キャンブ、エリザベス・フィッシャー『図説古代ギリシア』（吉岡晶子訳、東京書籍、2004年）、61-62頁参照。
- 15) 前掲書、60頁参照。
- 16) 伊藤俊太郎編著『人類文化史② 都市と古代文明の成立』（講談社、1974年）、246頁参照。
- 17) 太田秀通『生活の世界歴史3 ポリスの市民生活』（河出書房新社、1975年）、

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

24 頁参照。

- 18) Cf., Victor Davis Hansen, *Wars of the Ancient Greeks* (Washington: Smithsonian Books, 1999) p. 27. 『図説 古代ギリシアの戦い』（遠藤利国訳、東洋書林、2003 年）31 頁参照。
- 19) Cf., Sarah B. Pomeroy, Stanley M. Burstein, Walter Donlan, Jennifer Tolbert Roberts, *Ancient Greece: A Political, Social, and Cultural History* (New York: Oxford University Press, 1999) p. 24.
- 20) 母権中心の平和的な文明とされている。
- 21) 伊藤俊太郎編著、前掲書、245 頁参照
- 22) 周藤芳幸「ギリシア世界の形成」桜井万里子編著『ギリシア史』（山川出版社、2005 年）、37 頁参照。
- 23) Cf., Victor Davis Hansen, *op. cit.*, p. 27. 前掲書、31 頁参照。
- 24) Cf., Sarah B. Pomeroy, Stanley M. Burstein, Walter Donlan, Jennifer Tolbert Roberts, *op. cit.*, pp. 24–25.
- 25) 太田秀通『ミュケナイ社会崩壊期の研究』（岩波書店、1968 年）、211 頁参照。
- 26) 周藤芳幸、前掲書、42 頁参照。
- 27) ジョン・キャンブ、エリザベス・フィッシャー、前掲書、79 頁参照。
- 28) Cf., Victor Davis Hansen, *op. cit.*, p. 32. 前掲書、34 頁参照。
- 29) 暗黒時代とは、この前 1000 年を前後とする時代、もっと広くとれば諸宮殿が崩壊した前 1200 年頃からポリスが誕生してくる前 750 年頃までのことである（周藤芳幸、前掲書、44 頁参照）。
- 30) トウキディデス『歴史 1』（藤縄謙三訳、京都大学学術出版会、2000 年）、4 頁。
- 31) ジョン・キャンブ、エリザベス・フィッシャー、前掲書、21 頁参照。
- 32) クロード・モセ『ギリシアの政治思想』（福島保夫訳、白水社、1972 年）、10 頁。
- 33) 『イリアス 上』、13 頁。
- 34) 同書、44 頁。
- 35) 同書、同頁。
- 36) 同書、47 頁。
- 37) 同書、54 頁。
- 38) 同書、同頁。
- 39) 同書、54 頁。
- 40) 同書、55 頁。
- 41) 藤縄謙三『ホメロスの世界』（魁星出版、2006 年）、114 頁。
- 42) 『イリアス上』、51 頁。
- 43) 同書、52 頁。
- 44) 伊藤俊太郎編著、前掲書、251 頁参照。



- 45) ここでカッコつきで「王」と表記したのは、王と訳されているバシレウスが、地方豪族を意味する場合が多いからである。ヘシオドスの『仕事と日』では、このバシレウスは、「殿様方」と訳されている。ポリス形成後の最高執政官の役職としても、このバシレウスという名称が使われているので、ここでは、アリストテレスの『アテナイ人の国制』を翻訳された村川堅太郎氏の工夫であるカッコつきの王、すなわちバシレウスには「王（バシレウス）」という表記で対応したいと思う。
- 46) John V. A. Fine, *The Ancient Greeks : a critical history* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1983), p. 181.
- 47) クロード・モセ, 10 頁参照。
- 48) 『ミュケナイ社会崩壊期の研究』, 226 頁参照。
- 49) Cf., Victor Davis Hansen, op. cit., p. 33. 前掲書, 36 頁参照。
- 50) ホメロス『オデュッセイア 上』(松平千秋訳, 岩波文庫, 1994 年), 153 頁。
- 51) 『ミュケナイ社会崩壊期の研究』, 341 頁参照。
- 52) Cf., Victor Davis Hansen, op. cit., p. 44. 前掲書, 56 頁。
- 53) ホメロス『イリアス 上』, 198 頁。
- 54) ヘロドトス『歴史 上』(松平千秋訳, 岩波文庫, 1971 年), 169 頁。
- 55) 『ミュケナイ社会崩壊期の研究』, 414 頁参照。
- 56) アリストテレス『政治学』(山本光雄訳, 岩波書店, 1961 年), 34 頁。
- 57) トウキディデス, 4 頁
- 58) トウキディデス, 8 頁。
- 59) マックス・ウェーバー『古代社会経済史』(上原専禄・増田四郎監修, 渡辺金一・弓削達訳, 東洋経済新報社, 1963 年), 181 頁。
- 60) Cf., Sarah B. Pomeroy, Stanley M. Burstein, Walter Donlan, Jennifer Tolbert Roberts, op. cit., p. 162.
- 61) W. G. フォレスト『ギリシア民主政治の出現』(太田秀通訳, 平凡社, 1971 年), 236 頁。
- 62) ウェーバー, 前掲書, 182 頁。
- 63) 同書, 181 頁。
- 64) Homer, *Iliad Books 1-12*, translated by A. T. Murray, Revised by William F. Wyatt (London: Harvard University Press, 1999 (2nd edition)), p. 88. 『イリアス 上』, 60 頁。ホメロスの叙事詩は、基本的には翻訳に頼っているが、重要な概念のところだけは、適宜ギリシア語原典を参照した。ここは、LOEB CLASSICAL LIBRARY シリーズの *Iliad Books 1-12* を参照にしながら、訳語を適宜なおした。
- 65) Ibid., p. 398. 同書, 268 頁。前の注と同じく、ここは、フラトリアや竈という、

『イリアス』にみるポリス形成期の社会構造（的射場）

次のアリストテレスも引用している重要な箇所であるが、邦訳ではそこがきちんと出ないので、原典を参照しつつ訳語を直している。

- 66) アリストテレス, 35 頁。アリストテレスのホメロスの引用は、注 65 の箇所のそのままの引用なので、注 65 の訳語をそのまま採用している。
- 67) 『古代社会経済史』, 180 頁。
- 68) トウキディデス, 7-8 頁。
- 69) 伊藤貞夫「古典期アテネのフラトリア：その組織度をめぐって」『西洋古典學研究』1983 vol. 31 (1-18 頁), 17 頁。